

障害者に対する痛ましい事件の社会背景

2019.06.15to

1.はじめに

数年前には介護施設の職員が入居者(障害者)に対し痛ましい事件を起こした。また最近では、弱者への加害を危惧したことによる痛ましい事件も生じる世の中である。

この種の事件については、報道では事件の発生原因が加害者側の個人資質に結び付けられており、ほとんど深説りされない状況にある。しかも、事件後 2・3 日もすればこの世の中が何事も無かったかの如くの扱われ方である。

これでいいのであろうか。通常事件が起これば、事件原因の究明、事件で被害をこうむった方々へのケア、再発防止の三点がじっくりと考えられねばならない、といわれているのにもかかわらず、である。

ある福祉の講演会で著名人が講演されたとき、後で講師にこの問題を投げかけてみたところ、やはりもつと考えていかねば、と言っておられた。また、いろいろな機会において、この種の問題が話題になったときには(意識の高い低い関係なしに)根本に遡る論議が必要として熱い議論が続いていた。

ここで、そうした流れを受け継いで津々浦々から問題論議としてかかる問題を論評するとした。

2. 論論

ここでは、問題を個人素養の次元ではなく、社会の次元にてどう受け止めていくべきかを論ずることにした。論点は、社会的背景を社会論として歴史的かつ社会学的に設定した。

< 1 > 介護施設にて

(1) 介護施設の今日的状況

職員の人手不足、劣悪な待遇、無機質な施設。こうした環境では、普通の人間でも仕事に対し、受けて側(障害者)の人間に對し、反感ややるせなさを感じるこ

とが極めて多いという。これは、事件の背後に純然たる事実として横たわっている。

(2) 慈しみが霞む

介護は、人間を慈しむ心が無い限り出来るものではない。本来、職員は慈しむ心で受けて側に尽くしてきている。これがあるとき、項目(1)の理由でやるせなさに変わることがある。そのような場合、多くの仲間と共にスクラムを組んでいるので、思い直すことが多々あるという。(救われる話である)

(3) 被害者の家族

家族が受け手側(障害者)を厄介者として捉えていることも多い(そうせざるを得ないのかもしれない)。このため、施設の最大限利用という、施設おまかせ対応(現代版隔離化)ということになりがちである。

施設の職員はそうした家族に対応するのであるが、やるせなさは一段と膨らむという。もちろん、そうした人ばかりではなく、職員とのタイアップで少しでも受けて側のために、と心を碎く家族もいらっしゃる。

< 2 > 社会において

問題は社会にある。社会が施設をどう捉えているのか、人々がどう捉えているのか。すなわち、人間性とは、愛や慈しみとは、弱者救済とは、をみていこう。

(1) 現象

(1) 障害者の存在が恥じという気風

昔なら家族に肺結核患者でも出ようものなら、家族は世間にはひたすら隠し通していた。これと同じ調子で、今は障害者への認識には何か弓け目が横たわっているかのようにもある。なぜそうなるのであろうか。

(2) かまっちゃおられない気風

その背景には、普通が一番、皆さんと同じが一番。

極論すると、変わり者や障害者は人にあらずといった風潮が相変わらず残っている。

(3) 区別から差別へ

普通とそれ以外の区分がいつしか差別へと変わっていく。普通人が非普通人に対して優越に浸ることは(あまり)無いにしても、非普通人の苦しみを何とも思わなくなっている。これが区別から差別への移行を可能にし、しかも他人のことはどうでもよいといった他人存在不感症となっていく。

(2) 社会の根底には

先の現象の根底は、人間性希薄、関係性の断絶、観察力低下、思考力低下、思考の視点や視野の脆弱さがある。ではこれらは何に基づいて生じているのであるか。これについては；

- ・管理社会 ・効率優先社会
- ・経済至上主義 ・競争社会

を挙げたい。これらは今の社会を動かす大原則であり、理念理想の追求、人間性の追及は論外ぎみである。

少し歴史的にみると、まず江戸時代では、姥捨て山とか子ども置き去りが日常であり、経済的貧困が余分な生(生命)を受け入れられなかつたのである。また、隣組という監視体制のためであろうか、これがいつしか世間体という縛りを生み出し、異端を認めず平準化が促進し、障害者は即除外となつたといえる。そして、働けないのは働けない人の責任といったことがまかり通つたのである。

こうした歴史的背景は明治の近代化においてそのまま残り、戦後は近代合理主義のもとでの資本主義が発展し、過去の封建的な世間体文化を排除することなく、これを管理体制の枠に取り込んで今日に至つてゐる。

それにもう一つ、競争が優生あるいは劣等の風潮を固定化させてもいる。例えば受験の順位付けは人間をクラス分けし、人間価値に優劣を固定化させていく。これは、現代版の優生思考そのものであり、極論すると劣等排除志向の温床にもなつてゐるといえる。

3.まとめ

以上のように見えてくると、事件の根絶は長丁場になるので、今後に向けてどうしていくかといった議論の推進を急務したい。そのためには、まずは、事の本質を見極めることから始めなくてはならない。次に、社会体制の好ましからざる気風・論理を少しずつ変えていくことになろう。少し具体的に記すと；

(1)障害の受け止め方：障害が、人間関係希薄化を超えて異質の隔離を前提とするが如くとなっている。これを正し、異質は日常にあって当然であることを(全国津々浦々)自ら実践していくべし、と言いたい。

(2)人間の個性と多様性：依然と続く人間の同質化には、思考の同質化という一元思考をもたらし、非同質への暴力へつながっていく。こうした同質化傾向を多様化前提に変えるべきである。近年、多様化の時代といわれている割には、多様化に向けての対処はいまだなし、といつても過言ではない。

(3)今のところ上記二点を大きな改善点として、各人それぞれ置かれている環境において、福祉の理念を念頭において、改善に励むことが大きな力になっていくと考えている。

注1：本文では、過度な表現を避けておりますことお断り申し上げます。

注2：本稿は、多くの方々との論議を経てまとめたものであり、関係の方々には感謝申し上げる次第である。

注3：障害の表記について、障害、障碍、障がいの三記法があり、どれがいいかについては今もなお議論が続いている。ここでは、メジャーな表記でいきます。